

韓国における日本大衆文化の定着と 受け入れ様態

金 英 順*

(e-mail: rinkai@konyang.ac.kr)

目 次

1. はじめに
 2. 日本大衆文化と「日流」
 3. 日本語学習と日本文化の定着性
 4. 大学生の日本文化受け入れの様態
 5. 小括
-

1. はじめに

日本大衆文化の韓国への流入が本格化したのは1998年頃からである。それまでは陰性的な文化の代表格であったが、今やだれもが、いつでも、どこでも簡単に楽しむことができるようになったのである。アニメを中心とする映像分野から、小説を中心とする出版分野、クールなNippon Feelが陣取るファッション分野、若者が集まる街を彩る日本語のガンバンを掲げた飲食分野に至るまで、実に多様な分野が日本大衆文化として韓国社会に受け入れられているのである。あえて意識する必要のない、普段着の日常生活のなかに日本大衆文化が深く入り込んでいるのである。

ところで、学術分野においては、上記のような日本大衆文化の盛り上がり、すなわち「日流」についてどのような研究が行われているのだろうか。まず、崔在穆(2006)¹⁾は、

* 建陽大学校 日本語文化学科 教授

「日流」現象、特に「日流」のブームの限界とその克服方案の論議について論じた。「日流」とは、「日本文化の流行」であり、「韓流」、「漢流」、「仏流」のように、普遍的一般的な用語で、特殊用語でないと述べている。そして、「日流」が韓国社会に浸透しているにもかかわらず、ブームとして起こらない理由は、歴史問題と、韓国の儒教的伝統から発源する普遍的原理である「理」と、日本の現実的状況の原理である「力」が衝突しているからと分析する。「哲学的」な観点に立脚しながら歴史問題に原因を求める解釈は妥当かもしれない。しかしその一方で、そのようなハードルが、個人の趣味領域までをコントロールするという見方には若干違和感を覚える。

片茂鎮(2008)²⁾は、非常にユニークなアプローチから「日流」を取り上げている。韓国の国・公・私立大学の90校を対象に、日本語関連学科のカリキュラムを調査・分析し、その特徴及び背景を「日流」との関連で説いている。大学における日本語専攻を「日流」現象の一つとして捉え、「日流」は、「社会的な一現象として目立って表出はしていないものの、韓国社会に影響を及ぼしている」と指摘する。しかし、「日流」がなぜ、「目立って表出していないのか」についての明確な言及はなされていない。

安容柱(2008)³⁾は、日本大衆文化の開放が韓国社会に及ぼした影響及び、「日流」の形成について論じている。日本大衆文化を巨大産業として位置づけたうえで、「日流」には「韓流」ブームのような派手な現象はみられないが、底辺は広いと指摘は、にもかかわらず「日流」という用語が「誰もがわかるようなポピュラーなことば」として使われていないのは「日流」の受け皿が「若年層やマニア中心」であったことを挙げる。日本における「韓流」が、中高年女性を中心に展開され、韓国大衆文化ブームが巻き起こり、用語としても市民権を得たことを思い浮かべると、妥当な指摘といえよう。

これら先行研究は次のようにまとめることができよう。日本大衆文化は、実態として非常に広範囲に広がっているものの、一大ブーム現象を作るほどの勢いはない。そして、日韓関係や歴史問題がハードルとなってブームの可能性はさらに遠のく。したがって、「日流」という呼び方が求められる機会も少なかった、というのが主な論旨であるといえよう。

ところで、日本大衆文化の定着性が過小評価されてはいないだろうか。筆者は日本大衆文化が韓国の日常の一部として「浸透」していることを看過してはならないと考える。そこで、上記の先行研究を踏まえながら、本論文では、「日流」ということばの使用について、日本語学習と日本大衆文化の定着状況について、そして大学生の日本大衆文化の受け入れ様態についての考察を試みる。それらを通して、韓国における日本大衆文化の特

1) 崔在穆(2006)「韓国での‘日流’現状：特に日流ブームの‘限界’とその克服方案の論議を中心に」『日本文化研究』第36輯、p.83-101

2) 片茂鎮(2008)「韓国の大学における日本学関連科目と『日流』」『日本文化学報』第36輯、p.21-33

3) 安容柱(2008)「韓国の中の『イルリュ(日流)』に対する考察」『日本文化学報』第36輯(2008.2)、p.5-19

徴を把握するとともに、日本語学習と日本大衆文化受け入れとの関係性について考えたい。

2. 日本大衆文化と「日流」

「日流」という用語は、いつから使われはじめたのだろうか。正確には確認できないが、一つの手がかりとして、韓国の国立国語院が発表した「2004年 新語」の資料集に新造語として掲載されていることが挙げられよう。時期的な状況から推察すると、2004年、日本社会を席卷した「韓流ブーム」に対応する言葉として使用されるうちに、広く認知されるまでに至ったのではなかろうか。勿論、日本文化そのものは、それ以前から韓国において受容されていたのであり、一部においては「日流」、あるいはそれと類似した呼び方が使われていたのかもしれない。なぜなら、日本文化の韓国流入は、1998年以降、日本大衆文化開放政策の段階的实施とともに日本文化への関心が高まったからである。つまり日本文化がブーム化するきっかけは十分にあったのである。しかしながら、「日流」という用語が、2004年に新造語として発表されたということは、2004年になってようやくその呼び方が普及した、つまり、「大衆的」な認知を得たということになるのだろう。

では、「日流」という用語は、オンライン上ではどのように説明されているのだろうか。韓国の情報検索エンジンNAVERの国語辞書で検索してみると、「新語」であると表記した上で、「日本文化の人气がととも勢いよく巻き起こる気運及び氣勢」を意味する用語として説明している⁴⁾。次に、YAHOO JAPANで検索してみると、百科事典ウイキペディアにリンクした結果として、「主に中国、韓国などの国々で使われていることばであり、日本発の文化（主にサブカルチャー）を指す」と、解説している⁵⁾。

「日流」という用語は、YAHOO JAPANでは「百科事典」、NAVERでは「国語辞典」のことばとして有効であるといえよう。つまり、二つの検索エンジンの結果からは、「日流」という用語は日本では「国語的」な用語として確立していないが、韓国では「新造語」の国語としての歩みを始めていることが確認できる。「日流」という言葉が、今後も韓国社会において使われ続けるのだろうか、それとも一過性の流行語として消え去るのだろうか、その将来性を推測することは容易でない。さらに、日本社会において、「日流」という用語が百科事典の片隅に載るようなものとしてではなく、国語辞書にも載る、「韓流」のようにメジャーな言葉となる時代が来るかもしれない⁶⁾。「日流」という用語が言葉として生

4) http://search.naver.com/search.naver?where=nexearch&query=%EC%ED%D7%B5&sm=top_hy&fbm=1

5) <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%B5%81>

6) 韓流について『大辞泉』（大辞林）には、別名として「カンリュウ」を紹介するとともに、「東アジアに起こった韓国大衆文化の流行」とであると記述されている。

命力を保つためには、それが大衆的な認知を継続的に得られるかどうか前提となるであろう。言い換えると、日流的なもの、日本の大衆文化の普及、拡大の仕方によるものでもあり、日流現象そのものが、今後どのように展開されていくのか、その推移が注目されるところである。

ところで、前述の辞書の解説からして、韓日両国ともに「日流」は「文化」現象を意味する用語であることは明らかである。YAHOO JAPANでは、サブカルチャーとして「日流」を捉えているが、サブカルチャーが「社会の正統的、伝統的な文化に対し、その社会に属するある特定の集団だけがもつ独特の文化。大衆文化・若者文化など」⁷⁾を意味するのであれば、「日流」は「大衆文化」の範疇に入るものであろう。では実際に「日流」を受容している韓国では、「日流」の範囲をどのように認識しているのだろうか。それを知る手がかりとして、韓国で最も多くのネットコミュニティを抱えるDaumで「日流」を検索してみよう。多種多様なサイトが紹介されているが、その中で、2010年1月以降取り上げられたニュースの見出しだけをざっと拾ってみると次の通りである⁸⁾。

「遠い国、間隙狭める韓日」「韓日関係の今日と明日」「韓国の公演界に起こる日流熱風」「象牙の塔、ファンタジー小説にはまる」「弘大、江南駅には一軒先に『居酒屋』」「日流サービスで大陸突破する食品業者」「『仕事ない』と言っていた創業市場、再び日流の風が吹く」「韓・中・日の新三国誌、新しい100年創造すべき」「あ、酒井典子」「『ラーメン』で月500万の純利益」「オムツ・化粧品…生活の中に入り込んだ日本製品」「日流は文化・韓流はブーム…長い呼吸、立体的なキャンペーン必要」「韓流、日流と会ってより広い海へゆく」「ハングル、韓流、マッコリ」「大衆文化開放10年、韓流・日流の成果」

内容を見ると、「日流」という用語が使われる範疇は、歴史的・経済的・社会的な分野を網羅した、実に多岐にわたっていることがわかる。これは「韓流」という言葉と類似点が観察される。

そこで、日本のサイトで「韓流」という言葉を検索してみると、大辞泉(JapanKnowledge)には、「《「カンリユウ」とも》東アジアに起こった韓国大衆文化の流行をいう。日本では、平成14年(2002)に制作された韓国のテレビドラマ「冬のソナタ」の流行がきっかけとなった。ドラマに限らず、映画・音楽・アイドル・料理など、さまざまな方面で流行が見られる。」と紹介されている⁹⁾。つまり、韓国関連の流行が、文化領域を中心とする多方面において展開されてお

<http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?enc=UTF-8&p=%E9%9F%93%E6%B5%81&dtype=0&name=0na&stype=0&pagenum=1&index=18503021307900>

⁷⁾ http://dic.search.yahoo.co.jp/search?ei=UTF-8&fr=sb-necctp_sa&p=%E3%82%B5%E3%83%96%E3%82%AB%E3%83%AB%E3%83%81%E3%83%A3%E3%83%BC

⁸⁾ http://search.daum.net/search?w=tot&t__nil_searchbox=btn&q=%EC%ED%D7%B5

り、その現象を指す用語として解説されているのである。事実、「韓流」という言葉は、「韓流」現象が普及、定着するにつれて、「韓国文化の」、「韓国の」という言葉と同義語のように使われている例が多々見かけられる¹⁰⁾。さらにここで興味深いのは、「韓流」の読み方である。「カンリュウ」だけではなく、「ハン-リゅう [-リウ] 【×韓流】」と併記されているのである。これは「韓流」の震源地が中国であったことが背景にあるとはいえ、規模や勢いなど、韓流が日本社会に与えたインパクトがそれだけ大きかったことを示唆する一面とも捉えられる。

結局、「日流」と「韓流」は非常に類似した現象を指す言葉であるにも関わらず、両者の社会的認知度の差は大きいといえる。言い換えると、「日流」と「韓流」という言葉の社会的認知度における顕著な違いは、両者の中身、つまりカバーする領域の問題ではないかもしれない。筆者が「日流」という用語そのものにある種の違和感を覚えたのは、恰好の比較対象といえる「韓流」という言葉の浮上に原因があると考ええる。「韓流」に対して、「日流」の存在感は極めて希薄であったからである。とりわけ、用語面においてその傾向が著しい。韓国大衆文化の普及とともに用語としても社会的な認知度が高まってきた「韓流」とは対照的である。少し乱暴なまとめ方をすると、「日流」という用語は、「韓流」の出現によって、消極的に名づけられた呼称、まるで隠語のような位置づけになっているのではなかろうか。この現状に対する評価は保留するとしても、相互の社会に定着しつつあるメジャーな外国文化をめぐって、なぜこれほどの違いがみられるのだろうか。2つの言葉が意味する内容に大きな違いがないという現状を踏まえると、両者の社会的認知度の違いは、むしろ、「日流」、「韓流」の伝わり方、受け入れ方の違いによる差ではなかろうかという疑問に突き当たる。

事実、用語としての「日流」は、2004年以降、韓国社会において多用されている。しかし、「日流」の主な中身である日本文化は、日本大衆文化開放政策が始まる1998年以前からすでに韓国社会に根をおろしていた。漫画やアニメーション、ゲーム、音楽、映画…など多様なジャンルの日本文化が、韓国の日常生活のなかに溶け込んでいたのである。これは韓国政府が日本大衆文化禁止の立場を堅持せず、開放政策の実施に踏み切った理由の一つでもある。つまり、日本文化は、あえて意識されることもなく、異質感なく韓国社会に受け入れられていたのである。同じような意見は、金知竜氏の、「韓流はブーム」であるのに対し「日流は文化」だとする指摘と相通じるところがある¹¹⁾。つまり、「日流」は、社会的注目を集めながら、大々的なブーム現象として日本に上陸した「韓流」とは規模やインパクトの面でまった

9) http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?enc=UTF_8&p=%E9%9F%93%E6%B5%81&dtype=0&dname=0na&stype=0&pagenum=1&index=18503021307900

10) 例えば、「少子化対策韓流の挑戦」、「韓流おにぎり」など、大衆文化に限らず、「韓国の」という意味で用いられていることが確認できる(金(2007):151)。

11) 「韓流」が一過性に過ぎない社会現象であるかどうかをめぐっては議論の余地があるが、社会的に高い関心を集めたブーム現象であったことは間違いないし、そこに「日流」との大きな違いがあることは間違いないといえる。

http://video.chosun.com/site/data/html_dir/2010/08/13/2010081301948.html

く異なる。気がつかないうちに韓国人の日常生活の一部と化していたのであり、だからこそ、その現象を指す用語が特に必要ではなかったかもしれない。とりわけ、流行現象として、「～流」と取り立てて、あるいは総括して呼び改める必要性に乏しかったのではなかろうか。

ところで、「日流」、「韓流」という言葉の社会的な認知度の差が、当該文化の伝播の仕方によるところが大きいとすれば、「日流」や「韓流」の社会的影響の差についても注意しなければならない。なぜならば、言葉の認知度や受容者の外国文化に対する認識の有無は、当該文化の受容過程、その結果としての隣国認識等に少なからず影響を及ぼすものと考えられるからである。

3. 日本語学習と日本文化の定着性

日本国際交流基金の調査によると、2009年現在、世界における日本語学習者は133カ国・地域で、365万1761名である。そのうち、韓国の学習者数は96万4354名で、世界の学習者の約26.4%を占めている¹²⁾。2009年現在、韓国総人口が4874万名であることから考えると、韓国人50名に1人が日本語を勉強していることになる。しかも、この数値は、現在「勉強している」人の数であり、かつて「勉強した」経験をもつ人は含まれていない(傍点筆者)。日本語の学習経験者まで含めると、現在の学習者数である96万名をはるかに上回る、莫大な規模に達するであろう。

韓国において日本語学習を誘発する動機は、日本での韓国語学習機会とは比べものにならないほど多い。大学生は専攻及び教養の外国語として、高校生は第2外国語として、中学生は放課後活動の一環として、そして、社会人は昇進試験科目の一つとして等など、年齢層と関係なく多様な、高い学習機会、学習ニーズが存在する。次の<表1>は、韓国の日本語学習者を時系列にまとめたものである。

<表1> 韓国における日本語教育機関及び学習者数の年度別推移 (単位：年、名)

年度	初等・中等教育		高等教育		学校教育以外		合計	
	機関数	学習者数	機関数	学習者数	機関数	学習者数	機関数	学習者数
1974	--	--	--	--	--	--	54	12,249
1979-80	--	--	--	--	--	--	43	19,399
1984-85	--	--	--	--	--	--	445	356,852

¹²⁾ 2010年7月29日付、国際交流基金の「2009年海外日本語教育機関調査」結果(速報値)記者発表によるものである。http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/index.html参照

1990	428	403,744	71	31,329	--	--	499	435,073
1993	878	679,493	190	117,745	49	23,670	1,117	820,908
1998	1,890	731,416	233	148,444	--	--	2,123	879,860
2003	2,527	780,573	269	83,514	--	--	2,796	864,087
2006	2,473	769,034	398	58,727	--	--	2,871	827,761
2009	2,828*1	871,757*2	406	59,401	571	33,196	3,805	964,354

・備考：*1小学校3校を含む。 *2 小学生557名を含む。

・資料：国際交流基金「国別日本語教育機関数・教師数・学習者数」（各年度版）より引用作成
 (http://www.jpfi.go.jp/japanese/survey/result/index.html)。

この調査がはじまった1974年、韓国における日本語教育機関は54カ所、学習者は1万2249名と少数であったが、1980年代半ばを起点に急増を繰り返している¹³⁾。調査開始から35年後に当たる2009年では、機関数は3805カ所へと70倍増し、学習者数は96万4354名へと78倍増と、劇的な増加ぶりである。

日本語教育機関及び学習者等に対する詳細な分析は次回の課題とし、本稿では、日本語学習の目的と学習者数が、「日流」とどのような関係にあるかについて検討することにする。まず、注目すべきことは、韓国の中・高等学校における日本語教育である。2009年現在、中等教育、つまり、中・高等学校における日本語学習者は、87万1200名である。これは、韓国の日本語学習者96万名の9割を超える規模である。つまり、韓国の場合、日本語学習者のほとんどは中・高校生である。一方、高等教育の場合、機関数こそ増えつづけているものの、学習者数は1998年をピークに減少傾向を示している。2006年に比べ2009年にわずかな増加がみられたものの、1998年と比べてみると60%も減っていることがわかる。つまり、短期大学を含む大学以上の高等教育機関における「日本」関連の専攻者が減少する一方で、中等教育では機関数も学習者数も増え続けているという、不均衡な状況が続いている。

日本語を含む外国語学習は、社会や経済情勢の変化に敏感に反応する領域である。しかし、初・中等教育の一環として行われる外国語学習は、国の教育政策によるところが大きい。韓国の中・高等学校における日本語学習者数は、2006年に一時的な減少を記録するものの、90年代以降、20年あまりにかけて継続的に増加している。これは結果的には国の教育政策によるものであろう。

日本語の習得と日本文化の受容とが密接な関係にあることを鑑みると、韓国の中・高等学校における豊富な日本語学習機会は、日本大衆文化の受け入れ基盤づくりに大きく貢

¹³⁾ 1984-85年において機関数及び学習者数が急増したのは、高校教育において日本語教科が第2外国語として取り入れられたことによるものと判断される。

献しているといえよう。中学生、最近は小学生も含まれるが、子供の頃から「日流」を知る、好奇心を持つ機会が十分に提供されているのである。その期間が長期にわたっている点にも注意が必要である。「日流」が日常生活の一部として浸透する、無意識のうちに受容される環境が韓国にはすでに整っているのである。ある日突然、異国性や爆発的なブームの勢いを伴って伝わってきた「韓流」とは入口の段階からまったく異なる状況にある。

韓国の中・高等学校における日本語教育の役割に次いで注目すべきことは、日本語学習目的の時代的变化である。国際交流基金の『2009年海外日本語教育機関調査』によれば、日本語学習の目的は、「日本文化（歴史・文学等）に関する知識・情報を得るため」、「日本の文化（アニメ・マンガ・J-POP等）に関する知識・情報を得るため」、「日本語という言語そのものに興味があるため」、「日本語によるコミュニケーションができるようになるため」が主である¹⁴⁾。これらの学習目的は、いずれの教育段階においても共通して高い割合を占めている。このうち、日本語そのものへの興味は、すべての教育段階において一番に挙げられている。また、高校生になると、前述のような「文化」的な目的よりは、就職や受験等といった「現実」的な目的が優先される傾向にある。ちなみに、高校生は、「日本語への興味」に続き、「就職」を選択した人が2番目に多い結果となっている。

学習目的に関する17の選択肢には、2009年の調査からの新規項目もある。「日本の文化（アニメ・マンガ・J-POP等）に関する知識・情報を得るため」と、「学校教育機関で学ぶように定められている」という項目がそれらである。このうち前者は、諸外国において広がりを見せている「日流」を意識、現状を把握することを目的としていることは明らかである。事実、調査の結果を見ると、「日本文化」に関する項目のなかでも、小・中学生では「アニメ・マンガ・J-POP」の方が、「歴史・文学」より高く支持されており、現実を捉えた調査項目といえよう。そして後者についても、学習者に積極的な意欲がなくても、「日流」に接する機会が確保されているという点で重要である。「日流」が日常生活の一部として浸透していく上で必要な体系的な基盤の有無が確認できるという観点からして、同様の調査意図があるものと解釈できよう。

この調査は全世界の日本語教育機関を対象にしたものであり、調査の結果をそのまま韓国に当てはめることは難しいかもしれない。しかし、全世界の中・高等学校の日本語学習者の40%を韓国が占めている現状を鑑みると、大まかなところで韓国の日本語学習の実態を捉えているものと判断しても良いのではなかろうか。いずれにしても、日本語の学習目的は

14) 「日本語学習の目的」の質問は以下の17項目である。

日本文化知識(歴史・文学)②日本文化(アニメ・マンガ・JPOP等)知識③日本の政治経済社会知識④日本の科学技術知識⑤日本語への興味⑥受験⑦留学⑧今の仕事⑨就職⑩日本観光旅行⑪親善交流⑫日本語によるコミュニケーション⑬異文化理解⑭母語・一語⑮家族・親族等周囲の希望⑯学ぶよう決められている⑰その他

(http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/dl/news_2009_01.pdf参照。)

時代とともに変化してきたのであり、従来の現実的、手段的要素から文化的要素へと移行する傾向がはっきりと表れている。就職に有利、仕事に必要という実用性から、言語そのものに魅力を感じる、あるいは、アニメ・マンガ・J-POP・歴史・文学にいたる「日本文化」、言い換えると「日流」のツールとしての期待が主な学習目的として増加しているのである。

以上、外国語としての日本語の学習機会や教育段階別学習者数、さらには学習目的の変遷について見てきた。韓国の場合、中・高等学校の教科課程の中に日本語を学習する機会が確保されており、結果的に、日本語学習者が最も多い国であることが確認できた。そして、韓国における日本語学習者のほとんどを中・高等学校の学生が占めていた。また、日本語学習の目的が従来の実用的なものから文化的なもの、つまり、日本文化に対する関心や受容のためのツールとしての習得にシフトしつつあることも確認できた。これらを総合すると、韓国では「日流」への入り口が非常に大きく、かつ長期にわたって、体系的に提供されていると、指摘できよう。長期間にわたって体系的に日本語、日本文化に接するという状況は、「日流」を自然に、取り立てて外国文化として意識することなく、日常の中に取り込むようになる環境として最適であろう。さらに、学習機会が、実用的な学習目的の比重が相対的に少ない中等学校という早い段階から設定されていることも、「日流」への関心を高める要素として解釈できる。結局、韓国は「日流」を自然に導入、継続的に受容する上で極めて良好な環境にあり、そのことが「日流」という言葉をあえて必要としなかったのではなかろうか。

4. 大学生の日本文化受け入れの様態

日本語の学習者数から見る限り、韓国における「日流」をリードする層は中・高等学生であるように思われる。前出の<表1>から見ていくと、2009年現在の日本語学習者総数96万4354名のうち、大学生は5万9401名であり、全体に占める割合はわずか6%にすぎない。大学生の比率がピークを記録した1998年の17%と比べると、約3分の1の水準に減少している。日本語教育を行う高等教育機関の数は1990年の71校から2009年には406校へと570%もの増加を記録している対し、学習者数は減少の一途を辿っている。

短期大学や大学で日本語学習者が減少している要因については、日本語専攻者と非専攻学習者の2つの側面から考えることができよう。まず、入学の段階における減少として、日本語専攻者の変化が考えられる。「日本」関連学科の定員割れか、あるいは、募集定員そのものの縮小による影響である。いま一つは、在学段階での変化であり、日本語関連授業や受講者の減少が考えられる。なぜ高等教育の段階で日本語学習者が大幅に減少してきたのだろうか。原因については多様な角度からの考察を待つ必要がある

が、大学での専攻、或いはどんな（何の）講義を受講するかという選択基準は、本人の興味範疇に止まらないということを指摘しておきたい。とりわけ、それが言語専攻・科目であった場合、社会の需要と敏感に連動する、極めて有機的な関係にある。つまり、社会的ニーズの高さと「日本」関連学科、科目の専攻者、受講生の数は正の関係にあるとみられ、その結果が<表2>に表れていると見受けられる。

本稿において、大学段階での日本語学習者が減少している状況、並びにその背景の詳細を論じるつもりはない。しかし、前章において確認したように、学生が日本語学習を行う目的として、実用性以上に文化的関心の割合が増加していること、早期の段階から日本語学習が行われていることと考え併せると、現在の大学生の日本語学習者の多くは、「文化的」な関心から、「長期」にわたって日本語・文化に接している層である可能性が高いと考えられる。さらに、大学において日本語を学習していない場合でも、「日流」を受容している可能性が高いと考えられる。

このように、韓国は「日流」にアクセスしやすい環境であるが、では出口論の一つとして、日本関連を専攻する学生とそうでない学生との間では、「日流」受容による変化に何らかの違いがあるのだろうか。このような問題関心を明らかにしたく、本稿では、大学生の「日流」受容状況について行った調査結果の分析を試みる。この調査は、2009年12月、質問紙配布法によるアンケート調査を実施した¹⁵⁾。対象は建陽大学の学生であり、「日本言語文化学科」（以下「日本」学科と略称）学生68名と、その他学科（以下、他学科と略称）の学生71名、合わせて139名である。

まず、大学生が受容する外国文化全体のなかで、「日流」はどのような位置づけになっているのかについて知りたいと考えた。<表2>には、大学生がどのような国の大衆文化をよく接しているのかについて尋ねた結果をまとめた。

<表2> 大学生がよく接する大衆文化の国・地域別構成

		アメリカ	日本	中国	フランス	台湾	イギリス	その他
「日本」 学科	男	9.4%	62.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	28.1%
	女	8.3%	55.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	36.1%
	計	8.8%	58.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	32.4%
他学科	男	12.5%	37.5%	0.0%	0.0%	0.0%	4.2%	45.8%
	女	57.4%	21.3%	0.0%	0.0%	0.0%	2.1%	19.1%
	計	42.3%	26.8%	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	28.2%

まず、大衆文化の主な対象国がアメリカと日本に2極化している点の特徴的である。日

15) この調査は、韓日の大学生を対象に実施した「日流」、「韓流」受容実態に関する共同調査の一部である。共同調査の対象者は、建陽大学校と山口地域の大学生である。なお、本稿においては、建陽大学校の調査結果のみを使用する。

本とアメリカのなかでも、他学科の女子学生以外では日本を選択した割合が圧倒的に高い。「日本」学科の学生の過半数が、他学科の学生の4分の1以上が「日流」を受容しているという結果であり、大学での専攻と関係なく、「日流」が深く浸透している状況がうかがえる。これは、後述の「日流」の選好ジャンル調査の結果と考え併せると(表3>及び表4>を参照)、アニメやマンガといった大学生が最も興味を持つジャンルに優位を占める「日流」の特徴が強く影響していると考えられる。ただ、今回の調査で「その他」の選択率が非常に高いのは気になる点であり、今後の課題として残る。

次に、日本語学習経験を確認したところ、他学科の学生の71.6%が「あり」と答えている。日本語学習期間の内訳は、1年程度が55.6%、2年程度が26.7%での順である。2000年以降、中等教育における日本語学習者が急増するという韓国全体の状況がそのまま反映されているといえよう。「日本」学科の学習歴に比べると短い、専攻外でも圧倒的に多数の学生が日本語の学習経験を持つことが確認できる。このことから、「日流」との接点は、大学での専攻に制限されることなく、高い割合で確保されているといえよう。

ところで、大学生は「日本」についてどの程度関心をもっているのだろうか。関心「あり・なし」の質問で、「あり」と答えているのは、「日本」学科で98.6%、他学科で78.9%と両方とも高い。これは前記の日本語学習経験の構成費と類似している。さらに、他学科の男子学生の場合、日本語学習経験者は52.4%と相対的に低かったのに対し、日本への関心は他学科の平均を上回る83.3%が「あり」と答えている。これは、日本語学習の経験が「日流」への関心を持つ条件とは必ずしも言えない、ということを示唆していよう。後述になるが、多くの学生がインターネットを活用していることもこのような結果に影響しているように考える。日本からの膨大な情報量、大学生の圧倒的に高い情報収集能力など、「日流」への接点を持つうえで、韓国の大学生はバリアフリーの環境にいるといえよう。日本に関心ありと答えた学生に、具体的にどのようなことに関心をもっているか、について尋ねた(最多5項目までの複数回答)。選択肢には、従来の調査でもよく用いられる政治・経済、日本人、言語、旅行、文学、歴史、温泉、教育、スポーツ、家電製品、料理、伝統文化の他に、映画、ドラマ、芸能人、音楽、アニメ、マンガ、ゲーム、化粧・ファッション、など大衆文化的な事柄を追加した。この中で、学科を問わず、全体の回答の多かった上位10項目をまとめると表3>の通りである。

<表3> 日本への関心分野 (上位10項目、最多5つまでの複数回答)

		映画	ドラマ	音楽	アニメ	漫画	ゲーム	言語	旅行	温泉	料理
「日本」 学科	男	15.6%	28.1%	40.6%	53.1%	34.4%	37.5%	46.9%	31.3%	18.8%	31.3%
	女	27.8%	58.3%	25.0%	19.4%	22.2%	5.6%	44.4%	50.0%	30.6%	25.0%
	計	22.1%	44.1%	32.4%	35.3%	27.9%	20.6%	45.6%	41.2%	25.0%	27.9%
他	男	25.0%	25.0%	15.0%	70.0%	45.0%	30.0%	30.0%	31.3%	25.0%	30.0%

学科	女	25.0%	50.0%	22.2%	69.4%	33.3%	5.6%	27.8%	40.0%	38.9%	27.8%
	計	26.4%	43.4%	20.8%	73.6%	39.6%	15.1%	30.2%	35.8%	35.8%	30.2%

全体でみると、「日本」学科の学生では、言語への関心が最も高く、続いてドラマ(44.1%)、旅行(41.2%)の順である。最高率を示す言語の45.6%と最下位のゲームの20.6%との間に20%ほどの開きはあるが、特定領域に偏っているような印象は薄い。一方、他学科の学生はアニメが73.6%とずば抜けて高く、続くドラマ(43.4%)や漫画(39.6%)のほぼ2倍を記録している。これを男女別にみると、「日本」学科の男子学生はアニメ、言語、音楽、ゲーム、漫画の項目に高い割合を示すのに対し、女子学生の場合は、ドラマ、旅行、言語の項目に高い。他学科の男子学生はアニメと漫画、女子学生はアニメ、ドラマ、旅行に高い興味を示している。性別による目立った違いは見られない。ただし、学科を問わず、男子では「ゲーム」が、女子では「ドラマ」の選択率が圧倒的に高い結果となっている。

<表3>には上位10項目のみを提示したが、歴史、政治・経済、文学などのその他の選択肢については、何れも関心が低い結果となっている。日本語学習の目的でも確認されたように、大学生の日本への関心は、「日流」に代表される日本の大衆文化に傾倒しているようである。そして、この点に関しては、専攻による差異も特に認められない。そこで、大衆文化の中でも特に興味のあるジャンルについて尋ねたところ、<表4>のような結果となった。

<表4> 最も興味のある日本の大衆文化

		アニメ・マンガ	映画	ドラマ	ゲーム	音楽	ダンス	その他
「日本」 学科	男	37.5%	9.4%	15.6%	15.6%	12.5%	0.0%	9.4%
	女	28.6%	5.7%	51.4%	0.0%	8.6%	0.0%	5.7%
	計	32.8%	7.5%	34.3%	7.5%	10.4%	0.0%	7.5%
他学科	男	61.9%	4.8%	14.3%	4.8%	4.8%	0.0%	9.5%
	女	63.9%	2.8%	27.8%	0.0%	2.8%	0.0%	2.8%
	計	63.2%	3.5%	22.8%	1.8%	3.5%	0.0%	5.3%

アニメ・マンガ、ドラマに支持が高いという点では「日本」学科も他学科も共通している。特に他学科の方は、アニメ・マンガが63.2%、ドラマが22.8%となっており、2つを合わせると86%にも上る高率である。一方の「日本」学科は、映画や音楽、ゲームなどにもわずかながら関心が広がっていることが確認できる。これは、日本のアニメ・マンガが「日流」の主力分野であるという事実と合致しているといえよう。さらに、「日本」学科の学生の場合、他学科の学生に比べ、授業や課題、あるいはその他の交流機会など、「日流」に関する情報や接点の確保に相対的に恵まれている。そのことが、<表4>にみ

るような学科間の違いの背景にあるのではなからうか。

以上、日本語学習が「日流」受容に当たっての必要十分条件であるかどうかは、定かではない。しかしながら、当然予想されることではあるが、「日本」学科と他学科との比較から明らかのように、日本との接点や刺激の機会が常時確保できることが、「日流」の受容、特に多様なジャンルの受容を容易にしていることが確認できた。さらに、学科を問わず多くの学生が「日流」を受容しているという調査結果からは、韓国の中高等教育において日本語学習の機会が豊富であることが、韓国での「日流」の浸透につながっているということが再確認できた。

外国の大衆文化を知る・楽しむ上でインターネットはもはや欠かすことのできないツールとなった。その国へ直接出向かなくても、その国のリアルな情報をほぼ同時代的に知ることができるようになったのである。インターネットの普及とともに、世界各国・地域の文化や流行にいつでもどこでも接触することができるユビクォタス時代が到来したのである。そこで、ネット社会の申し子ともいえる今の大学生は、外国文化、とりわけ「日流」の受容に、どのような媒体を活用しているのかを尋ねた。そして、「日流」の受容にインターネットの活用による影響がどのように表れているのかについても分析を試みる。

次の<表5>には、調査対象者である大学生のインターネット利用時間とテレビ視聴時間を提示した。まず、インターネットの利用時間をみると、「日本」学科と他学科とではあまり差がない。一日に3～5時間程度が40%強と最も多く、次いで、1～2時間程度が40%前後を占める。

<表5> 1日平均インターネットを利用時間及びテレビ視聴時間

		30分 程度	1-2時間 程度	3-5時間 程度	6-8時間 程度	それ 以上
「日本」 学科	インターネット	6.0%	38.8%	46.3%	6.0%	3.0%
	テレビ	59.7%	28.4%	11.9%	0.0%	0.0%
他学科	インターネット	5.7%	40.0%	41.4%	7.1%	5.7%
	テレビ	28.6%	47.1%	18.6%	4.3%	1.4%

一方、テレビの視聴時間では、インターネット利用の場合と違って、学科別差異が目立つ。「日本」学科の学生は30分未満が59.7%と最大値で、続いて1～2時間程度が28.4%となっており、両者を合わせるとおよそ9割に近い。それに対し、他学科の学生では、1～2時間が47.1%でもっとも多く、さらに3～5時間も18.6%と高く、「日本」学科の2倍のレベルである。

テレビ視聴やインターネット利用に使用する時間の差異には通学時間やネット環境など様々なことが背景として考えられる。しかし、後述の「日流」の受容状況と考え併せると(<表8>)、「日本」学科学生が、テレビでは物足りない「日流」情報を、インターネット

で入手していることが影響した結果として捉えることができよう。

では実際のところ、大学生はどのような媒体を通して「日流」を受容しているのだろうか。まず、〈表6〉から、「日流」に触れたきっかけについて見てみよう。

〈表6〉日本の大衆文化に触れたきっかけ

		周囲の 勧め	新聞・ 雑誌	テレビ・ ラジオ	インター ネット	携帯 サイト	イベント	学校	街頭 ポスター	その他
「日本」 学科	男	18.8%	0.0%	28.1%	56.3%	3.1%	0.0%	28.1%	3.1%	9.4%
	女	13.9%	11.1%	30.6%	61.1%	2.8%	5.6%	36.1%	2.8%	5.6%
	計	16.2%	5.9%	29.4%	58.8%	2.9%	2.9%	32.4%	2.9%	7.4%
他 学科	男	20.8%	8.3%	4.2%	75.0%	0.0%	0.0%	4.2%	4.2%	0.0%
	女	12.8%	6.4%	29.8%	55.3%	0.0%	0.0%	17.0%	0.0%	2.1%
	計	15.5%	7.0%	21.1%	62.0%	0.0%	0.0%	12.7%	1.4%	1.4%

大学生がはじめて「日流」と接したきっかけは、学科や男女を問わず、インターネット利用がずば抜けて多い。インターネット利用の内訳をみると、「日本」学科では男女の差があまりなく、女子学生の方が男子学生より5%ほどわずかながら高い。一方の他学科では、男子学生が75.0%であるのに対し、女子学生は55.3%と低く、男女間におよそ20%の開きがある。その他のきっかけとしては、「日本」学科の場合、学校、テレビ・ラジオ、周囲の勧めの順に並ぶのに対し、他学科ではラジオ・テレビ、周囲の勧め、学校の順と続く。学校の順が相互に入れ替わっている点は、学科の特徴をよく表しているものと言える。また、上位に、学科と関係なく同じ項目が含まれていることにも注目したい。なぜなら、テレビ放送や周囲の勧め、学校の授業などといった、ごく身近なところに「日流」のきっかけが存在することが、大学生の「日流」受容率、持続率を高めていると考えるからである。いずれにしても、6割の学生がインターネットを媒体に「日流」と出会ったという事実は、今後のネット社会の進展とともに大学生と「日流」との接点が今後も保障されるということの意味していよう。

次に、大学生の経験した「日流」を尋ね、主なジャンル別に分けてみた。〈表7〉は、実際に経験したことのある日本の大衆文化作品のタイトルを5つまで挙げてもらい、ジャンル別に整理したものであるが、〈表4〉でみた主な関心分野の構成とほぼ同じ結果となっている。アニメ・マンガが最も多い。引き続き、ドラマ、映画、音楽の順に並ぶ。前述の文化の選好度同様、ドラマに女子学生が、ゲームやアニメ・マンガに男子学生が高い比率を示している。また、前記の、はじめて「日流」に触れたきっかけの6割がインターネットであったことに照らし合わせても妥当な調査結果と読み取れる。アニメ・マンガ・ドラマ・映画・音楽といったジャンルは、インターネットをツールとして簡単に接続、楽しむことができ

るからである。全く同じ観点から、ゲーム選択率の低さを解釈することができよう。選好する分野の調査では、男子学生においてゲームに対する関心が非常に高かったが、経験率は予想外に低い。これは日本のゲームが、ゲーム機を中心に発達していることを反映した結果として理解できよう。また、ダンスを選択した者がいない点も、若手歌手グループが大勢進出している韓流とは事情が異なる様相を呈する部分として興味深い。以上のことから、韓国社会におけるインターネット利用の普及は、大学生の「日流」受容、経験するジャンルに少なからぬ影響を及ぼしているといえよう。

<表7> 視聴経験のある日本文化作品のジャンル別構成（最多5つまで複数回答）

	アニメ・マンガ	映画	ドラマ	ゲーム	音楽	ダンス	その他
男	52.6%	13.9%	17.7%	1.4%	12.4%	0.0%	1.9%
女	44.9%	13.8%	36.4%	0.0%	4.3%	0.0%	0.7%
計	48.1%	13.8%	28.8%	0.6%	7.6%	0.0%	1.2%

では、大学生が、1日かなりの時間をインターネット利用に使用し、「日流」の触れるきっかけとしてもインターネットを一番に挙げていることを確認してきたが、彼・彼女らは現在、実際どのような媒体で「日流」を楽しんでいるのであろうか。また、大学での専攻による違いはみられるのだろうか。「日流」受容する具体的な方法として、テレビ・ラジオ、インターネット、本・CD・DVD購入、レンタル、周りの人に借りる、コンサート・イベント参加、ファンクラブ活動、日本へ行く、その他を選択肢として提示した。複数回答の中で、上位5位までを整理してみると、次の<表8>の通りである。

<表8> 日本の大衆文化を楽しむ方法（複数回答）

		テレビ・ラジオ	インターネット	本・CD・DVDの購入	レンタル	日本へ行く
日本 学科	男	18.8%	100.0%	34.4%	12.5%	9.4%
	女	27.8%	88.9%	41.7%	8.3%	13.9%
	計	23.5%	94.1%	38.2%	10.3%	11.8%
他学科	男	8.3%	79.2%	8.3%	12.5%	8.3%
	女	29.8%	66.0%	8.5%	10.6%	2.1%
	計	22.5%	70.4%	8.5%	11.3%	4.2%

前述の調査結果同様、現在の受容方法においてもインターネットを挙げる人がダントツに多く、韓国の整備されたインターネット環境が、「日流」の普及に大きく貢献しているといえよう。特に「日本」学科の男子学生は100%である。インターネット利用は、「日本」学科の方が、男子学生の方が、他学科や女子学生に比べ高い割合を示す。次に、ラ

ジオ・テレビ、レンタルの項目では、学科別、男女別目立った差が見られないが、本・CD・DVDの購入並びに「日本へ行く」という項目では、「日本」学科の学生が他の学科の学生より高くなっている。このような結果になった背景として、大学の授業や課題の負荷が学科別に異なる点に関係しているかも知れない。しかし、結果的に「日流」を積極的に楽しむことができ、そのことがその先の「日流」の拡大、発展につながっていよう。ここで第2章の内容に立ち戻ると、高等教育における日本語学習者が減少していることは、前期の「日本」学科学生のような積極的な「日流」受容者の減少につながる可能性を示唆してははいないだろうか。

5. 小括

本稿では、韓国における日本大衆文化の定着性、受け入れ様態、そして日本語学習の特徴について考察した。まず、社会的認知度の低い「日流」という言葉について見てみると、「日流」という言葉は、新造語の部類に取り扱われていた。このことは、日本文化開放政策の段階的实施や、日本文化が韓国社会に受け入れられていた実態とは乖離がある。「日流」の認知度が低い背景としては、「韓流」のように、社会的に注目を集めるほど規模の大きいブームを巻き起こしたわけでもなく、「日流」という言葉が社会的認知を得た時期にはすでに日本の大衆文化が韓国に受け入れられ、定着しつつあったため、改めて呼び方が必要となることはなかったからである。また、「～流」というブーム現象としてではなく、徐々に日常に入り込んだからでもあろう。

韓国での日本語学習の現状を見てみると、中等教育過程から日本語教科が導入されており、結果的に、全世界の日本語学習者のおよそ2~3割に達している。また、日本語学習の目的も実用性の高いものから文化的関心へと移行する傾向が観察された。日本語教育の体系化、充実化は、「日流」を受容する基盤の充実化につながるといえる。結局、韓国では早期の段階から、長期間にわたって日本語を学習できる体系的な環境が整っていたのである。

このような状況を踏まえて、「日本」学科と他学科の学生を対象に日本大衆文化の受け入れ様態を確認した。その結果、日本語学習経験の普遍化が「日流」受容層の底辺を拡大していることが認められた。そして、「日本」学科の学生のように「日流」との接点を日常的に持つ学生の方が「日流」をより多様な方法で積極的に受容していることが分かった。つまり、このような状況は、日本への関心や日本認識の好転を働きかける役割をしているといえよう。

【参考文献】

- ・ 安容柱(2008)「韓国の中の『イルリュ(日流)』に対する考察」『日本文化学報』(第36輯)、pp.5-19
- ・ 金恵媛(2007)「韓流の受容とブーム—中高年女性と大学生の観点から—」『日本文化学報』(第35輯)、pp.151-170
- ・ 崔在穆(2006)「韓国での‘日流’現状：特に日流ブームの‘限界’とその克服方案の論議を中心に」『日本文化研究』(第36輯)、pp.83-101
- ・ 片茂鎮(2008)「韓国の大学における日本学関連科目と『日流』」『日本文化学報』(第36輯)、pp.21-33
- ・ 前田康博(2005)「金大中大統領の対日大衆文化開放政策の歴史的意味—反日の克服から他文化受容へ—」『大妻女子大学紀要』(Vol.37)、pp.45-57
- ・ 小倉紀蔵(2005)『韓流インパクト ルック 코리아 と日本の主体化』、講談社
- ・ http://search.naver.com/search.naver?where=nexearch&query=%EC%ED%D7%B5&sm=top_hy&fbm=1
- ・ <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%B5%81>
- ・ <http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?enc=UTF8&p=%E9%9F%93%E6%B5%81&dtype=0&lname=0na&stype=0&pagenum=1&index=18503021307900>
- ・ http://search.daum.net/search?w=tot&t__nil_searchbox=btn&q=%EC%ED%D7%B5
- ・ <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/index.html>
- ・ <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/index.html>
- ・ http://video.chosun.com/site/data/html_dir/2010/08/13/2010081301948.html

要 旨

本論文では、韓国の大学生の日本文化受け入れに関する実態調査を利用し、日本大衆文化の定着性と受け入れ様態についての考察を試みた。はじめに、日本の大衆文化を指す代表的な言葉の一つとして「日流」を取り上げ、「日流」が指す範囲、用語の使われ方、社会的認知度等について検討した。次に、日本文化の受け入れに当たって重要なツールである日本語の学習状況について検討した。その結果、韓国の日本語学習が学校教育に組み込まれていることから、早期から始まり、かつ長期間にわたって実施する体系的な環境が整っていること、そのことが日本文化への関心増大、日本文化の定着へとつながっていることが確認できた。また、以上の事から、韓国では日本大衆文化が日常の一部として定着しており、日本で新たな大衆文化ブームを巻き起こした「韓流」の場合のように、改まった呼び方を求めるニーズが少なかったものと判断される。日本語学習の普及状況、日本の大衆文化の積極的な受け入れは、調査対象者の大学生においても確認できた。また、「日本」学科と他学科を比較してみると、授業や課題で日本大衆文化に接する機会の多い「日本」学科の学生が日本大衆文化をより多様な、積極的な方法で受け入れていた。

キーワード：日本大衆文化、日本語学習、「日流」、定着性、受け入れ様態、大学生

투 고 : 2010. 8. 31

1차 심사 : 2010. 9. 11

2차 심사 : 2010. 9. 25